

調査プロットの検討を行う保護林の基礎調査結果

○二岐山ミズメ林木遺伝資源保存林	1
○甲子・二岐周辺冷温帯ブナ植物群落保護林	2
○八幡岳周辺冷温帯ブナ・ミズナラ植物群落保護林	3
○越後山脈森林生物遺伝資源保存林	4
○増沢モミ植物群落保護林	5
○滝天然サワラ植物群落保護林	6
○南房総暖温帯性植物群落保護林	7
○赤谷山天スギ林木遺伝資源保存林	8
○白山ケヤキ林木遺伝資源保存林	9

二岐山ミズメ林木遺伝資源保護林

設定目的	天然生ミズメ林の保護。
調査結果	
林分概況	前回調査時と比較して、大きな変化は確認されていない。保護林内にミズメの生育量は少く、一部に散在している程度である。保護林内はチシマザサやアスナロの低木や稚樹が繁茂し、ミズメの中・低木や稚樹・実生はほとんど認められない。
調査プロットの代表性検討結果	前回調査のプロット1・2はいずれも、ミズメの高齢木を含む林相であり、保護林の代表的な地点といえる。当保護林は、次年度において甲子・二岐周辺冷温帯ブナ植物群落保護林と統合される見込みである。統合後のプロットを検討する。
課題等	ミズメの後継木や、プロット周辺で確認されているミズメ成木の分布状況や活力状態に留意する。また、本保護林内のヒノキアスナロは、火山細屑流堆積地上に成立する天然のヒノキアスナロ群落であり、この地域の特徴的な群落の一つである。当保護林は、平成30年度に甲子・二岐山周辺冷温帯ブナ植物群落保護林と統合される見込みである。統合後のプロットを検討する必要がある。

甲子・二岐周辺冷温帯ブナ植物群落保護林

設定目的	チシマザサ・ブナ群落広がっている林分及びウラジロタデのような植物が生育する高山の砂礫地、トウホクサンショウウオのような両生類が生息する湿地、ホンドモモンガが営巣する樹洞のある巨木など、様々なスケールの多様な環境等を保護するため設定した。
調査結果	
林分概況	本保護林内の大部分はブナが優占する群落広がりが、その上部にブナに次いで広範囲に分布するササ・ダケカンバ群落認められる。さらに上部には高山植生がみられ、ツツジ類やハイマツを主体とした低木林が分布している。特に赤面山には高山帯の多様な低木群落や草本群落が見られる。また、二岐山などの山頂付近ではキャラボク群落が見られたり、斜面下部の火山細屑流堆積地上にはヒノキ・スナロやスナロ群落などが見られ、本保護林の特徴的な群落の一つとなっている。
調査プロットの代表性検討結果	本保護林を代表する林相として、ヒノキ・スナロ・ミズメ群落、キャラボク林、ササ・ダケカンバ群落、ハイマツ群落、コメツツジ群落、カリヤスモドキ群落、ササ草原、ウラジロタデ群落、ガンコウラン群落、自然低木群落などが挙げられる。また、森林生態系多様性基礎調査も行われており、老齢木のブナが混生するホオノキ群落で調査が行われている。また、当保護林は、次年度において二岐山ミズメ植物群落保護林と統合される予定であるため、二岐山ミズメ植物群落保護林の調査プロットと併せて検討する。
課題等	来年度が初めての現地調査であるため、調査プロットの設定が必要であり、本保護林を代表する林相を主とした調査プロットの設定を検討するとともに、森林生態系基礎調査の活用も検討する。また、次年度二岐山ミズメ植物群落保護林と統合される予定であるため、二岐山ミズメ植物群落保護林の調査プロットと併せて検討する。

八幡岳周辺冷温帯ブナ・ミズナラ植物群落保護林

設定目的	自然植生、歴史的な価値、森林に生息・生育する動植物にとっては重要な環境条件等を保護するため設定した。
調査結果	
林分概況	保護林内はほぼブナが優占する群落に覆われており、その林床にはササが優占するタイプやシロヤシオが優占するタイプが見られる。また、保護林西部にあるピークにはツツジ類を主体とした風衝地低木群落もみられる。さらに西側の端の急傾斜地には溪畔林やイヌブナ群落が見られる。
調査プロットの代表性検討結果	ブナが優占して下層にシロヤシオが生育する林分と、ミズメが優占してイヌブナが生育する林分が本保護林を代表する林相と考えられる。
課題等	来年度が初めての現地調査であるため、調査プロットの設定が必要であり、本保護林を代表する林相を考慮して、来年度以降のモニタリング調査の調査プロット設定を検討する。

越後山脈森林生物遺伝資源保存林	
設定目的	越後山脈に属する御神楽岳、本名御神楽岳、笠倉山及び、日尊倉山周辺の自然状態が比較的良好なブナ林及びサワグルミ・トチノキ林、スギ天然林並びにミヤマナラを主とする自然低木林など、日本海側多雪地の森林群落が大規模に良く保存されている地域において、これらの森林と一体となって自然生態系を構成する生物の遺伝資源を森林生態系内に保存し、将来の利用可能性に資するため設定したものである。
調査結果	
林分概況	前回調査時と比較して、大きな変化は確認されていない。チシマザサーブナ群団、ブナーミズナラ群落、自然低木群落が保護林の大部分を構成している。
調査プロットの代表性検討結果	前回調査のプロット1・2は、胸高直径40-80cmのブナが優占する林相で、保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。また、現在の調査プロットがブナ群落だけであるため、保護林の主要群落の一つである自然低木群落についても植生調査などで把握しておく必要がある。
課題等	環境植生図(5万分の1)によると、保護林内の3分の2程度はブナが優占する群落で占められており、残りの3分の1の殆どは自然低木群落と自然裸地により構成されている。現状ではブナ群落でしか調査を行っていないため、自然低木群落においても調査(植生調査)を行うことを検討する。

増沢モミ植物群落保護林

設定目的	天然生モミ群落の保護。
調査結果	
林分概況	<p>前回調査時と比較して、大きな変化は確認されていない。次世代の低木や実生は少ないものの、中齢から老齢級のモミが多く生育し、保護対象であるモミ群落は、良好な状態で維持されている。</p>
調査プロットの代表性検討結果	<p>前回調査のプロット1は、胸高直径50-80cmのモミが優占する林相で、高齢木・老齢木に枯損は見られず、保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。</p>
課題等	<p>特に問題は見受けられず、今後も良好な状態で維持されていくと考えられるため、既存の調査プロットで継続して調査を行う。本保護林は平成30年度に範囲拡充予定であり、拡充範囲内における新規調査プロット設定の検討が必要である。</p>

滝天然サワラ植物群落保護林

設定目的	天然サワラ林の保護。
調査結果	
林分概況	<p>前回調査時と比較して、大きな変化は確認されていない。次世代を担うサワラの低木や稚樹は少ないものの、保護林全体に中齢から高齢級のサワラが生育し、保護対象であるサワラ群落は、良好な状態で維持されている。また、保護林外の周辺部において同様なサワラ群落が存在しないか踏査を行ったところ、沢を隔てて対岸の斜面に同様なサワラ群落が存在することが確認されている。</p>
調査プロットの代表性検討結果	<p>前回調査のプロット1は、胸高直径20-40cmのサワラが優占する林相で、高齢木に枯損は見られず、保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。</p>
課題等	<p>次世代を担うサワラの低木や稚樹は少ないものの、保護林全体に中齢から高齢級のサワラが生育し、保護対象であるサワラ群落は、良好な状態で維持されている。本保護林は平成30年度に範囲拡充予定であり、拡充範囲内における新規調査プロット設定の検討が必要である。</p>

南房総暖温帯性植物群落保護林

設定目的	モミを主とし、スギ、アカマツ等の針葉樹にカシ、シイ、シデ類やヤブツバキ、カエデ類等の広葉樹が混交する房総半島南部の代表的な天然林であり、これを保護するため設定した。
調査結果	
林分概況	前回調査時と比較して、大きな変化は確認されていない。保護林全体に高齢から老齢級のモミが生育し、また、中齢から高齢級のアラカシやウラジロガシが混生している林相にある。保護林全体に、ニホンジカの糞や角研ぎ痕が確認されており、次世代を担うモミの低木や稚樹は少ない。
調査プロットの代表性検討結果	前回調査のプロット1は、胸高直径60-100cmのモミが優占する林相で、高齢から老齢木に枯損は見られず、保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。本保護林は、次年度範囲拡充予定であるため、拡充区域内の林相を把握した上で、新規に調査プロットを設定することを検討する。
課題等	高木層を形成するモミやアラカシ、ウラジロガシについては、健全な状態で維持されている。シカによる影響に留意する。当保護林はH30年度に面積拡充される見込みである。拡充範囲内において、新規調査プロットの設置を検討する。

赤谷山天スギ林木遺伝資源保存林

設定目的	裏日本型東北・北海道型における天スギの遺伝資源の保存。
調査結果	
林分概況	<p>前回調査時と比較して、大きな変化は確認されていない。スギの実生、稚樹は確認されているが、スギの中齢から高齢木の50～70%に及ぶ個体に、幹周の20～50%に及ぶ、ツキノワグマによる剥皮被害が発生している。</p>
調査プロットの代表性検討結果	<p>前回調査のプロットは、胸高直径40～80cmのスギが優占する林相で、保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。また、本保護林は次年度範囲拡充の予定であり、拡充区域において新規プロットの設置を検討する。</p>
課題等	<p>上層を構成するスギは現段階では健全に生育しているが、ツキノワグマによる剥皮被害留意する必要がある。本保護林は平成30年度に範囲拡充予定であり、拡充範囲内における新規調査プロット設定の検討が必要である。</p>

白山ケヤキ林木遺伝資源保存林

設定目的	裏日本型東北・北海道型におけるケヤキの遺伝資源の保存。
調査結果	
林分概況	<p>中齢から高齢級のケヤキが生育している。生存しているケヤキ立木に枯損木はほとんど見られず、健全に生育している。ヤマビルが多く、調査時期によっては吸血被害に注意が必要である。</p>
調査プロットの代表性検討結果	<p>前回調査のプロットは、胸高直径30-58cmのケヤキが優占する林相で、保護林の代表的な地点といえるため、前回調査プロットを活用して調査を行う。また、本保護林は次年度範囲拡充予定であり、拡充範囲内におけるケヤキ群落の生育状況を把握するための調査プロットの新規設定の検討が必要である。</p>
課題等	<p>上層を構成するケヤキは健全に生育しているが、次世代を担うケヤキの低木や稚樹が少ないことから、林下に生育するケヤキの生存量、生育状態に留意する必要がある。また、本保護林は平成30年度に範囲拡充予定であり、拡充範囲内における新規調査プロット設定の検討が必要である。</p>